

石狩小学校校舎活用 案

- ・円形校舎は校舎としての形（設計）が円形となっており、学校建築としても貴重な建物である事を踏まえ歴史遺産として保存し、有効活用を図っていく。
- ・教育委員会では円形校舎のみではなく、増築部分、体育館、校舎周辺敷地の活用も含めて検討を依頼されたと考える

- ① 円形校舎については、校舎のそのものの構造や機能面を整理する。
- ② 歴史ある石狩小学校であることを踏まえ、石狩の学校教育の歴史（あゆみ）がわかる資料や物の展示室が必要。
- ③ 一昔前の教室の情景が再現された展示室が必要。
- ④ 石狩市で統合・廃校・閉校になった学校は多い、これらの学校があった証しを示すような展示室が必要である。

※② ③ ④については、このような展示が石狩にないため必要である。

更に、児童生徒の「学校の歴史」を学ぶ場（見学・体験学習）としても必要と考えるが、教職員、市民の研修や視察の場としても必要である。

◆このように教育に関わる展示は、最低でも円形校舎一階部分全部を使いたい。

- ⑤ 現在、砂丘の風資料館、浜益資料館、道の駅の展示はあるが、石狩市の農業・酪農（開拓）、漁業、生活の歴史を児童・生徒や市民が学ぶ場がない。
そこで、上記※印とも関連するが、円形校舎2階部分を活用し、石狩の産業や生活の歴史をしっかりと展示する部屋にしてほしい。
- ⑥ 増築部分は、各種活動の場、収蔵庫、実習室、場合によっては特別展示会場等に活用できると考える。
- ⑦ 体育館については、きちんとした仕切りも設置し大小文化財の保管収納の場として、市内に分散されている文化財を整理整頓して保管（場合によっては見学可能）する場所としてほしい。
- ⑧ 校舎周辺については、プールは撤去が必要である。
- ⑨ 校舎周辺には、緑を増やし、公園化をすすめ、外に展示可能な碑や遺物の展示を希望する。
- ⑩ このような活用にかかわって、看板や説明板など訪れる児童生徒や市民に分かりやすい表示を考えてほしい。

平成 30 年 8 月 14 日

石狩市教育委員会 殿

北海道教育大学札幌校教授

百瀬 響

石狩小学校円形校舎利活用について

石狩市立石狩小学校統合後の同校円形校舎の利活用方法について、第 5 期石狩市総合計画および教育プラン等に基づき、貴市における文化の活用の中でも、特にアイヌ文化・歴史と教育・生涯学習他の観点から、次の 2 点を提案致します。

1. 石狩場所と石狩アイヌに関わる歴史資料展示を行う（歴史や文化の展示）。
2. 樺太アイヌと石狩市の関係性を示す資料展示を行う（過去・現在・未来を示す展示）。

1. 石狩場所と石狩アイヌの歴史を示す資料展示について

現在、石狩市における歴史展示施設には、「石狩砂丘の風資料館」および関連施設、「はまます郷土資料館」、そして新設の「あいろーど厚田」内の展示等があります。これら複数の施設が存在するにも関わらず、アイヌ文化資料については、数点（パネル展示を含め）にとどまることから、貴市の歴史を示す上で、十分な資料が展示されているとは言い難い状況にあると考えます。そこで、アイヌ文化・歴史展示の必要性を、「石狩市都市マスタープラン」および「教育プラン基本計画（後期）」に沿って根拠を述べます。

石狩市都市マスタープランによれば、守るべき「誇りある歴史や文化」として、以下のような記述がなされています。

「石狩は、幕末には石狩役所などが置かれ、箱館、松前、江差などと並んで、蝦夷の政治や経済の中心地として栄えていました。弁財船などを通じて伝えられた文化は、明治期に俳句結社「尚古社 しょうこしゃ」として花開き、今に伝えられています。しかし、幕末から明治にかけて全盛期を迎えた石狩ですが、今の石狩市に発展するまでの道のりは、平坦なものではありませんでした。長い間、基幹産業として地域を支えてきた鮭漁の壊滅的な衰退と復活への取り組みや、砂地を稲穂の実る水田へと変えた砂地造田の取り組みなど、先人の労苦を忘れることはできません。私たちは、この誇りある歴史や文化を守り、石狩市の発祥の地である本町地区を、私たちの心のふるさととして、また、石狩の顔として、未来へ引き継いでいくまちを望みます。」〔石狩市都市マスタープラン（H26 部分見直し版）からの引用。傍線は筆者に

よる。]

この文章にあるように、石狩は、「蝦夷の政治や経済の中心地」として栄え、北海道の歴史上、重要な役割を担った地であります。そして、「幕末から明治にかけて全盛期」を迎えた背景には、「基幹産業として地域を支えてきた鮭漁」があったからに他なりません。近世以来、鮭漁（およびニシン漁）は、石狩十三場所をはじめとする村山家他の漁場経営者らとその労働力であったアイヌらによって担われてきました。

それにもかかわらず、アイヌに関する展示が少ない理由は、現在、貴市在住のアイヌ系住民の人口が少なく、かつその方々の多くが、アイヌをあえて標榜していないことも要因であろうかと思えます。加えて、戦後の歴史学において、近世アイヌの漁場労働が強制労働と解釈されることが多かったことから、差別を含む「デリケートな問題」として回避されるという社会的風潮も、多少は影響しているかもしれないと想像いたします。

しかしながら、「石狩市郷土研究会」等、優秀な生涯教育活動をはじめとする、地域史料に基づく研究成果の積み重ねにより、最近では一方的な強制労働とは異なる解釈も、歴史学上提出されている状況にあります。今後、研究が進むにつれ、次項で述べる樺太アイヌをめぐる貴市の歴史と同様、協力関係をも含む様々な関係性が、アイヌと和人の間で明らかになるであろうと予想されます。

一方で、石狩の繁栄を支えてきた漁場とアイヌの歴史展示に、貴市博物館施設が消極的と見なしうる現状は、貴市が、負の遺産としてこの歴史を回避していると思われる可能性もあるのではないのでしょうか。それは、例えば貴市「教育プラン基本計画」における「この地で育てられたことを誇りに思い、『ふるさと石狩』のプライドを持って歩むことのできる、思いやりと自立した精神をもつ人材を育てる教育」あるいは「鮭文化・ニシン文化の発信」と矛盾を生じるのではないかと危惧せざるを得ません。

以上のような北海道史上の問題に加え、アイヌ文化の上でも重要な意味を、貴市は持っている可能性があります。それは、日高地方のアイヌらによって、浜益地区に、アイヌの叙事詩ユーカラの主人公の住居があったと見なされていたためです。石狩を舞台とするこの壮大なアイヌ文学世界を、「ふるさと石狩」「石狩PRIDE」を醸成し、未来に引き継ぐ文化遺産として、石狩内外に示すことも、有益であろうと考えます（この点については、百瀬が貴市の委託を受け、現在研究を進めております）。

さらに、生涯教育活動のみならず、これらの歴史・文化を今後教材化し、貴市の子どもたちの教育に役立てることも、有効な活用方法となるでしょう。

2. 樺太アイヌと石狩市の関係性を示す資料展示について

前項でも記したように、貴市には石狩アイヌに加え、樺太アイヌとの関わりの歴史があります。貴市の八幡墓地にある樺太アイヌ人骨は、千島樺太交換条約によって対雁（江別市）に移住させられたアイヌ住民が、疫病によって激減した際に、来札等に再移住した人々の遺骨です。石狩アイヌである豊川重雄氏らによる樺太アイヌ史研究会が、平成 3 年、石狩市へ遺骨調査を要請したのに対し、石狩市では予算を計上して、遺骨の発掘、慰霊碑建立やその後の豊川氏らによる慰霊祭の実現に協力した経緯があります。

さらに、現在貴市は、平成 30 年度設立予定の国立アイヌ民族博物館慰霊施設に関わる問題に伴い（別紙に関連資料を付します）、遺骨の扱いについて、樺太アイヌ協会との話し合いを重ねておられます。この間、貴市は一貫して、遺骨問題に誠実に対応・尽力されてきました。

この歴史的経緯や現在進めておられる樺太アイヌ協会との交渉、そして今後関係をどう築かれるのかについては、前項で述べた「まちづくりミッション」における【市民像】「石狩 PRIDE」～いしかりへの愛着、誇り」を形成することにつながり、しいては【都市像】「〔創造〕～文化、交流、創造するまち〔絆〕～絆や人のつながりを大切にするまち」をまさしく体現する行為に直結するものであります。

この点に関しては、今後も貴市と樺太アイヌ協会（ないし遺族会）と十分協議を重ね、貴市と同協会の過去・現在・未来を展示として示すことによって、石狩市の地方都市としての先見性と文化度を後世に示されてほしいと考えております。それこそが、貴市が国内のみでなく、世界に誇りうる「未来に引き継いでいくまち」としての「石狩 PRIDE」の在り方であり、まちづくりミッション戦略目標にある「いろんないしかりの顔をつくる」「いしかりが誇る人や文化を育てる」ことであると考えます。

以上、1.近世史における石狩アイヌ展示および、2.近代史以降の樺太アイヌ展示の必要性について記しました。前者は膨大な資料があり、後者は今後積み重ねていく歴史によって資料（すなわち内外に知らしめる貴市の示す姿勢）が増えていくことと存じます。両者を一緒に扱うことは避け、それぞれ独立した展示を行うのが適当かと存じます。

参考資料

遺族会設立「遺骨は末裔が慰霊・供養」／北海道

毎日新聞 2018 年 6 月 4 日 地方版

<https://mainichi.jp/articles/20180604/ddl/k01/040/123000c>（最終閲覧日 2018 年 8 月 14 日）

旧樺太(サハリン)に暮らしていた樺太アイヌ(エンチウ)の子孫らが3日、大学や研究機関などに、研究材料として保管されているアイヌ遺骨の返還を目的とする「エンチウ遺族会」を設立した。

遺族会は、政府による遺骨の集約に反対し、樺太アイヌの遺骨はその子孫が引き取るべきだとして、団体として遺骨返還を求めていく。返還された場合は適切に慰霊、供養し、旧樺太で再埋葬することも含め検討する。当面は樺太アイヌ(エンチウ)協会の会員ら20人が中心となって活動し、会長には同協会の田沢守会長が就いた。

政府は今年5月、北海道大など全国の大学が保管するアイヌ遺骨について、これまで遺族のみとしていた返還の対象を、出土した地域に縁のあるアイヌ団体にも広げる方針を決めた。一方、身元不明や引き取り手がない遺骨は、2019年秋にも白老町に完成予定の慰霊施設に集約するとしている。

田沢会長は「国の政策では樺太アイヌについては触れられてもいない。エンチウ(樺太アイヌ)の遺骨はエンチウの末裔(まつえい)が引き取って慰霊・供養すべきで、当事者として意思を表明し行動しないといけない」と話した。【安達恒太郎】

訂正 「遺族会会長」はおらず、田澤守氏は「遺族会仮代表」に就任の間違いです。

石狩小学校校舎の利活用について

越田賢一郎

1 石狩小学校統合後の建築物の保存について

- (1) 建物の保存のために、耐震検査、耐用年数などの調査を行い、使用年限をあらかじめ計画しておく必要があるかと思われます。
- (2) 道開拓記念塔のように、50年で劣化するものもあります。今残すことは重要なことですが、行政として、この建築物を何年維持し、その後建築物内に収められたものをどのようにしていくのか、100年先までとは言いませんが、20年から30年先までの見通しを考えておく必要があるのではないのでしょうか。

2 活用の基本構想について

- (1) 学校の歴史とともに、石狩市内の教育史を語れる場としての利用
 - ・市域にいくつかの廃校の存在
 - ・それぞれの学校内に資料が残されている。また、活用されている校舎もある
 - ・それも、やがて取り壊す時期が来る
 - ・それを統合しておく場を必要としないのか
- (2) 石狩本町の地域交流の場としての位置づけ
 - ・石狩浜、石狩灯台、砂丘の風資料館、番屋の湯など多くの人が入り込む地域
 - ・砂丘の風資料館の中核的役割
 - ・体験学習施設、野外学習施設としての活用
 - ・各学校を卒業した人々の、故郷に集まれる場としての活用

3 必要な検討内容

- ① 学校の歴史100年を示すもの
- ② 石狩の100年史と教育史、他の廃校資料の受け入れの場
- ③ 砂丘の風資料館の拡大的利用の場 体験施設、実習施設、収蔵部門
- ④ 本館との役割分担 特に学校があった時代の展示がこの場で必要なのでは
- ⑤ 市民、来訪者への開放部分（校庭、プール、体育館等をどう活用するか）

石狩小学校の活用提案

前提1：建物は本来、創建当初の用途で使われ続けるのが理想である

前提2：石狩教育委員会は文化財課のアネックスとしての利用を意図している

前提3：学童保育としての利用も期待されている

建物の歴史的価値

1. 北海道内にある現存最古の円形校舎である
2. 鉄筋コンクリート造の校舎としても函館市を除けば古参の部類に入る
3. 坂本鹿名夫以外が設計した円形校舎としても日本国内で古参の部類に入る

全国の円形校舎

1. 坂本による最初の円形校舎は昭和29年の私立富士見中学・高等学校
2. 群馬県高崎市の新島学園短期大学（昭和31年）は国の登録有形文化財
3. 三重県の朝日町小学校（昭和37年）は国の登録有形文化財
4. 現存最古の現役の円形校舎は長野県飯田市の浜井場小学校（昭和30年）
5. 一般公開されているものとして円形劇場くらしフィギュアミュージアム（旧倉吉市立明倫小学校、昭和30年）が有名

活用提案

1. 主に石狩市内の小学生を対象とした宿泊・体験学習施設

宿泊の方法として、i) 教室に造り付けの2～3段ベッドを設置する、ii) 校庭にテントを設営、などが考えられる。テントは体育館ステージ横の収蔵室に保管が可能である。

「円形校舎の教室で授業を受ける」ことも体験学習の一つである。教室を最低でも1室は「教室」の状態で、授業を行えるように保存（復元）してほしい。

増築部分を文化財課として利用した場合、そこで、文化財保護業務（例えば埋蔵文化財の整理など）をワークショップ的に体験でき、学校教育と生涯教育のタイアップが期待できる。

調理器具も一式あるので、調理実習的に食事を作ることも可能である。

宿泊を伴わない体験学習のみの利用も可とする。

人数が多くなければ、近隣の市町村からも受け入れを考えても良い。

税金を市民に還元することにもなる。

2. 一般人の宿泊用途の付加

ホテル機能は無理なので、簡易宿泊所あるいはゲストハウスの用途を目指す。食事は基本自前で調達する。調理実習室の一部を宿泊客に開放すれば可能となる。冬季間以外であれば、グラウンドにカマドを設置して、そこで自炊してもらうことも可能であろう。石狩特産の農産物や水産物の活用も期待できる。

入浴施設の付加は、新設にも維持管理にも金銭的負担が大きいため、隣接する番屋の湯の利用を促す。食事についても番屋の湯のレストランとのタイアップを模索したい。

「給食」風な朝食を提供できると、宿泊者の楽しみにもなる。ちなみに札幌では「給食カフェ」（瓶の牛乳、コッペパン、先割れスプーンなどを提供）が流行っている。

復元にあたって

1. 中央ホールのトップライトは魅力的なので、復元してほしい
2. 窓サッシは創建時の写真と、設計図面とでは仕様が異なるため、更なる調査が必要

石狩小学校円形校舎利活用のための提案書

石山優子、伊井義人

○提案の趣旨：「交流」「地元住民」をコンセプトを中心とした提案

○背景

長所…海への徒歩圏にある、

本町地区のシンボル（象徴）＋ゲートウェイ（入口）的存在となる円形校舎を有する

石狩小学校の卒業生という財産

課題…円形校舎の今後の利活用についての地元住民の意向が不透明

地元地域の高齢化、地元の学齢期児童生徒の集まれる拠点の不足、

本町地区の宿泊場所の不足

○目的

- ・ 地元住民の各世代（「子ども」「30代」「高齢者」）
- ・ 地元住民、石狩市民全体、市外からの人たち（観光客）…が交流できる場の構築

→本町地区の住民の一体感が維持向上できる場

- ・ 既存の施設（弁天会館：コミュニティセンター・資料館・保護センター・観光センター）とは異なる特色を持った施設＋既存の施設と連携できる施設…の構築

○提案

- ・ ハード面

：地域住民などが、イベントを開催したくなる多目的施設（ラーニングコモンズ的な雰囲気）

：子どもから高齢者まで安全に使用できるユニバーサルデザイン（バリアフリーなど）

- ・ ソフト面

：既存の施設（いしかり砂丘の風資料館や石狩浜海浜植物保護センター、番屋の湯、石狩市観光協会など）が協働で行うイベントの実施の可能性の模索

：石狩市内外の大学（藤女子大学・北海道教育大学・北海道科学大学・北海道大学）・教育機関との連携

- ・ 地元住民の意向調査

：今後の手続きを進める上でも、早急に地元住民の意向調査を実施

→①校舎の今後に関する興味関心の向上、②校舎活用へのサポート意識の向上への足がかり

：実施にあたっては、行政に加え、調査員などで大学生などの協力を得ることも検討